生涯学習情報誌
- フォンズ -
Fons
No. 94　2023年4月25日発行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 / FAX:0294(72)8880
Webサイト:https://hitachiota-fons.jp/

写真:小沢駅　岡部 守博さん(彰博さんの父)

小さな冒険

岡部 彰博 さん（小沢町）

平成一七年（二〇〇五年）三月三一日、日常に溶け込んでいた一つの音が鳴りやんだ。日立電鉄（通称チン電）が廃線になった日だ。

そこからさかのぼること約十五年前の小学校中学年、初めて友達と三人で最寄りの「小沢駅」から電車賃六十円を握りしめ「常北太田駅」へ出発した。先頭車両の一番前に直立不動。見慣れない線路からかき分けられる景色が、僕らを夢中にした。

常北太田駅に着くや否や、大人と車で行く太田の街中とはまるで違う景色に見えた。車の窓からいつも見ていた当たり前の景色。大きく違う事は、その場を歩いているからだ。それだけで、それだけなのに心が躍った。

小沢駅は無人駅なので、帰りは常北太田駅で初めての切符を購入。その切符を駅員さんに見せる自分の顔はきっとドヤ顔であっただろう。行きには気付かなかったが、ホームに行くと、ホームが一つだけじゃないことに動揺した。と同時に、奥には休んでいる電車が数両あることにテンションが上がった。出発して間もなくすると見慣れた景色が近づいてくる。里川を渡るころには、いつも堤防にいる牛、お墓が見えてきて、さらには家業の酒造りのシンボルでもある煙突が存在感をだしてくる。たった一駅であったけど小沢駅に降りた時には、安堵感でいっぱいだった。

太田に行くことから始まり、茂宮駅にボウリング、久慈浜駅に海、プール、スケート。そして中学には練習試合で水木駅へ。今でも色あせることのない思い出。ありがとう、チン電！

日立電鉄線

［取材］阿部 深雪、塩原 慶子

最近では「日立電鉄線」というローカル線があったことをご存じない方も多くなり、その事実にちょっとしたショックを受ける、今風の言葉でいえばジェネレーションギャップ?!

二〇〇五年に廃止となってしまった日立電鉄に関する本・冊子を手にする機会があり、あのチンチン電車を大切な思い出としてとどめようとしてくれている方々にお話をうかがってきました。

絵本がたくさん置いてある素敵なカフェのオーナーさんから知人を通してこの絵本を教えてもらったのは昨年の夏。「日立電鉄の絵本があるのよ」と。遠く富山県射水市で開催されている「おおしま国際手づくり絵本コンクール」の最優秀賞を受賞し同絵本館が発行しています。

「海べの町へ」著者：ときさき きよし 発行：富山県射水市大島絵本館
おおしま国際手づくり絵本コンクール2015 最優秀賞

夏休みに一人の男の子が、親戚のいる海べの町へ「チンチン電車」に乗って会いに行くお話です。ページをめくると、里川の土手にいつも草を食んでいた黒い牛の絵や、一面の田んぼの中を走るチンチン電車、沿線のお米屋さんの店先の風景など、常陸太田にお住いのかたなら皆さんが「なつかしぃ～」と歓声があがるに違いない絵が続きます。

著者のときさきさんは、高萩市にお住まい。子どもの頃、お母さんのご実家へ遊びにいくたびに、常磐線大甕駅で日立電鉄線に乗り換え常北太田駅までチン電で出かけたときの思い出が絵本となったそうです。

［寄稿］ときさき きよし さん

二十代後半に谷内こうたさんの絵本をみて、郷愁を覚える作風など子どもをあまり意識しない絵本に刺激をうけて絵本作りを試みるようになりました。何冊か作りましたが、仕事を持ちながらでは、ままなりません。定年近くになって、日立電鉄線が廃線になるというニュースを知りました。チン電の思い出。母の実家が常陸太田から北に行った山あいの里。実家に行くときは必ず大甕駅からチンデンに乗った。乗車時間は十五分か二十分くらいの短い時間でしたが変化にとんだ景色に胸が躍った。海辺の町、潮の香り、拡がる水田、そして最も胸がわくわくさせられたのは、大橋駅に差しかかり、その先から人家の屋根を見下ろしながらゆっくり走っていく景色、橋脚が高く、ここに差しかかるときはいつも胸をワクワクさせられた。

遠くに見える山々、石を切り出す岩肌、駅の倉庫、里川に差しかかる橋、土手に寝そべる牛たち、常陸太田の古い町並み、異国に来たみたいでした。それらを絵本に残したいという気持ち。

十一年前に定年を迎えて描き出す。絵筆を持つことが少なかった時間が長かったため、ギャップを埋めるのが大変だった。絵を描くにあたってスケッチや写真撮影に何度も出かけた。

あとがきに、「今」ある時間、たちまち過ぎていく時間、一日一日の大切さ、などと書いてありますが、あとで気づくと、村で暮らす子どもにとって町に出かけていくことは出会いの旅、未知への憧れ。それらが自然に絵本に出ていると思いました。

今日ものんびり　日立電鉄

武相鉄研（ぶそうてつけん）ＯＢ会発行

ひょんなことから日立電鉄の写真集をみつけ、懐かしさにどっぷりはまって奥付をみたら、いかにもオタクのような6人の男性の雄姿に目が留まりました。冊子を企画発行しているのは「武相鉄研ＯＢ会」の皆さん。神奈川県にある中高一貫の私立男子校・武相高校の部活として、山田京一先生（当時）を顧問に1979年に活動を開始した由緒ある鉄道オタクの活動記録でもあります。このような貴重で詳細な記録を残していただけたことに尊敬を込めてオタクと呼ばせていただきます。

2005年の廃線が決まってすぐ、2004年春から何度も取材で足を運び、合宿や部活動以外にも、個人的に取材を重ねてこの冊子が生まれました。「旧大橋駅ちかくの鉄橋付近は、当時も施設の老朽化が進んでいて、電車がゆっくりとごとごと走るのが思い出深いです」と山田さん。「道路と並走する線路を、車に乗って撮影した沿線のDVDも懐かしいです。」

BRCプロ発行・プチ写真集（小冊子）のご案内

※QRコードをスマートフォン等でスキャンするとアクセスすることができます。

⑫ 路上に残る踏切を示す標識

⑭ 橋脚跡

⑮ 常磐道高架西側に続く線路跡。踏切跡が連続して現れる。

⑬ 綺麗に砂利が残る線路跡

⑯ バラストと呼ばれる砂利が残る

⑰ 大橋駅から常磐道高架東側。精米所の背後に残る築堤。常磐道を東に越したあたりから大橋駅手前の民家を超える鉄橋に向かって高度を上げる。

⑱ 精米所正面

㉓ 久慈浜駅跡(現 日立市南部図書館)から大みか方面BRTを望む

㉒日立市南図書館にある日立電鉄のモニュメント

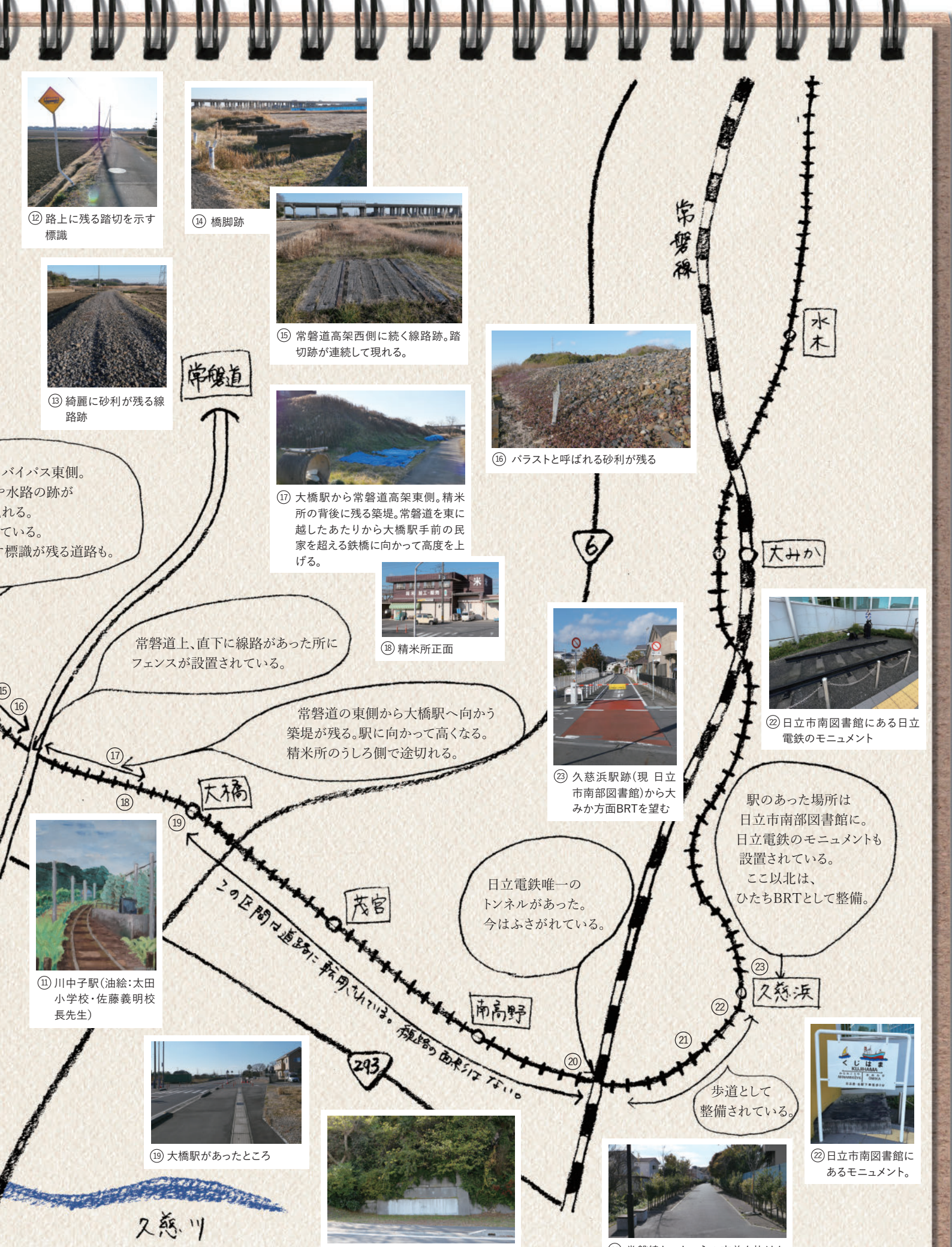
⑪ 川中子駅(油絵:太田小学校・佐藤義明校長先生)

⑲ 大橋駅があったところ

⑳ 常磐線とのトンネル交差があった場所。トンネルは塞がれている。

㉑ 常磐線とのトンネル交差を抜けた先、久慈浜駅へと続く線路は歩行者用の道に転用。

㉒日立市南図書館にあるモニュメント。



日立電鉄◎廃線跡を久慈浜まで歩いてみた

［取材］ 阿部 深雪、塩原 慶子

駅があった場所は
ドラッグストアに!!

線路跡は
未利用のまま
空いている。

常陸岡田駅は現在
“岡田町樋口”というバス停に。
小沢駅に向かう線路跡は
茂宮川の部分だけ渡れないが
他の部分は探索できる。
また、国道293号のアンダーパス部に
向かって線路跡はつづく。

比較的大きい
踏切跡が
路面に残る。

国道293号
踏切の跡や
連続して現
橋梁も残っ
踏切を示す

2023年2月現在
県の合同庁舎付近の
線路跡は道路へ転用
するために工事中。

里川の土手に
跨線橋の橋台が
片側だけ残る。
国道349号～里川まで
線路跡は道路に転用

小沢駅跡は駅があった
気配が強く残る。
また駅から里川に向かい
徐々に築堤は高くなり、
里川の土手へと続く。
途中水路用の橋台が残る。

国道293パイパス西側から
川中子駅（今はJAの施設に）
その先国道293号のアンダーパスまで
線路跡は道路に転用されている。

① 常北太田駅から南側へ続く線路の跡。

② 国道349号バイパス東側。県の合同庁舎北側の線路跡道路転用に向けて工事中。

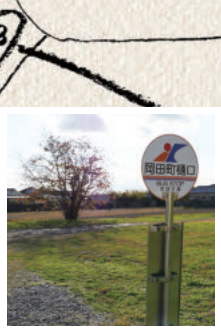
③ 里川土手に残る跨道橋橋台付近に残る日立電鉄の用地境界杭。廃線になった線路沿いにたくさんみられる。

④ 国道349号バイパス東側から里川への道路転用区間の終点。跨道橋の橋台が片側だけ里川土手に残る。

⑤ 小沢駅ー里川の間の築堤上から東側を望む

⑥ 小沢駅付近、道路上に残る踏切跡。

⑦ 国道293号バイパスから大橋方面に続く線路跡を望む



⑧ 常陸岡田駅だった場所に立つ岡田町樋口バス停

⑨ 国道293号アンダーパス

⑩ 川中子ー常陸岡田間、国道293号アンダーパスより東側。線路を道路に転用している区間。

「手作りマップ」 金砂郷小学校

［取材］ 萩谷 浩司、鴨志田 弘子

金砂郷小学校では、旧久米小学校だった数年前から夏休みの課題として地域の手作り地図を制作しています。令和三年度の作品、「野生動物からの被害大調査」は第二十五回全国児童生徒地図優秀作品展にて審査員特別賞を受賞しました。昨年度の作品について先生や児童たちに話を伺ってきました。

地図制作は平成三十年度からスタートしました。地図作りを指導している梶間容子先生は、当時三年生を担任しており、授業で国土地理院の方を招いてお話を聞いたのがきっかけです。地図について勉強した後、手作り地図の作品展があるので参加してみたらと勧められて参加することになったそうです。昨年度は八人が参加し五作品ができあがりました。子どもたちに感想を聞いてみると「大変なこともあったけど、とにかく楽しかった。見たこと聞いたことを地図にしていく過程で新しい発見があり、楽しんで取り組めた。」と話してくれました。五枚の地図は自分たちで調べて学んだ地域の新発見であふれているように感じました。

「私たちのエコの町」鯉渕莉央さん、斉藤栞菜さん

通学時にソーラーパネルが目に入ってどれくらいあるか気になって調べました。

※QRコードをスマートフォン等でスキャンするとマップを拡大して観ることができます。

「常陸太田市内の城跡マップ」瀧沢ゆうみさん、瀧沢元起さん

元起君がお城好きで、NHKの「鎌倉殿の十三人」を観て佐竹氏に興味を持ったのが取り組んだきっかけです。

「山田川新発見」清水佑多郎さん、清水順生さん

家が山田川に近く、サイクリングに行ったとき魚が死んでいたり、釣り道具が捨ててあったりしたのが気になり調べてみました。

「旧金砂郷町ここ50年の変貌」窪谷美留さん

中学生のお姉ちゃんと一緒に作りました。人口密度を調べる資料を探すのが大変だったです。

「身近な道路も危険がいっぱい」引田倖乃珠さん

通学路に危険を感じる所があったので、他の子たちにも気付いてほしくて調べました。

「馬坂城址散策図」馬坂城址保存会

［取材］萩谷 浩司

佐竹氏発祥の城とされる馬坂城。昨年は大河ドラマでも取り上げられ話題となりました。しかし数年前までは地域でもあまり知られることのない場所だったそうです。現在は整備され、散策図もできた馬坂城址を支える活動について馬坂城址保存会の赤須順さん、梶山義光さん、土田惣一さん、日座正則さんにお話を伺いました。

馬坂城の本郭までは以前から行けるようになっていましたが、その周りの整備は行われておらず、せっかく見学に来た方がいてもそこまでで帰ってしまうような状況でした。地域の人も木や草が生い茂っていてどうなっているのか知らない方も多かったそうです。そこで馬坂城址を改めて地元の人にも知ってもらいたいと二〇一六年、十九名で馬坂城址保存会を立ち上げました。木や竹や藤の蔦などおよそ七割を伐採、間伐して整備には二年間ほどかかりました。間伐した木や竹は散策路途中のベンチや、柵などに使用しました。

※QRコードをスマートフォン等でスキャンするとマップを拡大して観ることができます。

左から土田惣一さん、赤須順さん、梶山義光さん、日座正則さん

整備された散策路には看板も取りけられましたが、全体が分かった方が歩きやすいだろうと散策図を作成しました。縄張り図を基にメンバーの赤須順さんが実際に歩いて作られた散策図は、鳥かん図のように木の茂みや小道もしっかりと書かれていて非常にわかりやすいと好評だそうです。また見晴らし箇所にある外の風景を描いた展望図も、現在は木々で見えなくなっている風景が実際に見えるかのようなリアルさがあります。整備された後は馬坂城址を訪れる人も増え、二〇二一年には手作りの大手門も設置されました。地域の人にも改めて自分が住む地域の歴史について再確認してもらえ、大切にしていこうという心が生れたと感じているそうです。赤須さんは「地域が盛り上がるのはオーケストラのようなもので方向性を示す指揮者のような人がいて、私のように地図を描く人、様々な人が自分の持ち場で地域を盛り上げるためにがんばっています。」とおっしゃっていました。

馬坂城本郭

思い出の絵本

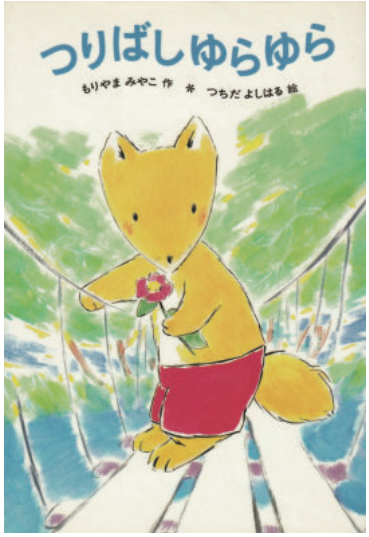
『つりばし ゆらゆら』

西場 洋一（新宿町）

世に、吊り橋効果、恋の吊り橋といわれる理論がある。高所で揺れる吊り橋を渡って出会った男女は、お互いに恋愛感情に発展しやすいというのだが…。

それかあらぬか、この物語に登場する動物たち、きつねのこ、くまのこ、うさぎのこは、吊り橋の〝むこう〟にいるという、おんなのこやおとこのこに対して、ほのかな憧れと恋情を抱く。ある日、きつねのこは、まだ見ぬ吊り橋の〝むこう〟のおんなのこに会いたいと、勇気をふるって吊り橋を渡り始めるが、進むうちに足がすくんでしまい数歩進んだところで立ち往生してしまう。しかし、それからは毎日のように吊り橋を訪れ、一歩一歩、歩を進める。そして、ある朝、ついに橋の真ん中に達する。吊り橋の〝真ん中〟は、行きたいけれど行けない、行けないけれど行きたいと、心がもっとも揺れる分岐点になっている。吊り橋の真ん中で、きつねのこは、向こう岸にいるおんなのこの姿を求めて呼びかける。「またいつか あそぼ」この〝いつか〟は、優しさと懐かしさをないまぜにして、読むものにとっての〝いつか〟ともなる。

読むたびに、橋の〝むこう〟に想いを馳せて、揺れる吊り橋の真ん中へと歩みを進めたくなる。



※お知らせ
「ちょっとひといき」「ほっとひといき」「常陸太田の地名話」は、都合によりお休みいたします。次回をお楽しみにお待ちください。

新太田点描 29

一貫斉中山信敬

水戸徳川家の家臣中山備前守信吉は、徳川頼房が水戸に封ぜられた時に家康公から直々に付家老を命じられ、家臣団のなかでは別格の扱いを受けていた。

元来、中山氏は相模国小田原北条氏一族の八王子城主の北条氏照の重臣であったが、北条氏が豊臣秀吉によって攻め滅ぼされた時、信吉の父中山勘解由も主君と運命を共にしている。

この時、家康公は勘解由の遺児信吉を小姓として取り立て頼房公に仕えさせた。これが明治維新まで続く水戸藩付家老中山家の初端由縁である。

初代信吉から十四代信徴までは水戸藩領の中に別高の知行地を拝領し領主として水戸藩の影響を受けながらも独自の支配体制を敷いていた。

知行地は当初松岡（現・高萩市地方）であったが宝永四年（一七〇七）に太田地方へ知行替えとなり九十六年後の享和元年（一八〇三）再び松岡へ戻っている。

中山氏が領主として太田地方を支配した期間は約一〇〇年ほどであったが、この間は六代信敏、七代信順、八代信昌、九代政信、十代信敬ということになる

さて今回の主役となる中山信敬はこの時期に太田地方の最後の領主となっていた期間と重なる。

中山信敬は明和元年（一七六五）水戸家五代藩主徳川宗翰の九男として生まれ、八歳の時養子として中山家に入り十代目当主となった。幼名は大膳、諱は初め信徳と称したが後に信敬と改名している。

信敬の長兄六代藩主治保は逝去後に文公と諡号されたほどの学問好きで、藩内では義公の再来と期待され、停滞していた大日本史の編纂事業を推進した。信敬もまた文公同様に文雅・風流の嗜みをもち、特に詩・書と絵画に秀でていて自からの作品には「一貫斉」という号を記していることもある。文政三年（一八二〇）没。享年五十五歳

さて左に掲げた一幅は信敬が描くところの「梅花朝陽圖」である。タテ百十一・〇cm、ヨコ三十四・〇cm、絹本の画面中央にいま咲誇りの白梅花を胡粉彩色豊に描いている。落款には「信敬画」の署名があり押印は「一貫斉」である。

ところで、この画に賛を寄せているのが水戸藩九代藩主の斉昭公である。つまり信敬から見れば甥の子ということになる。信敬の没年時に斉昭公は二十歳で未だ藩主になる前の部屋住み時代であったので大叔父の画に賛をすることは常識的には考えられない。

そこでもう一度この画を凝視してみると、斉昭公の賛の位置が少し右に偏り微妙にバランスが悪い。これはどうしたことか。今考えるに、恐らくは信敬の没後に遺品としてあった時には賛など無かったであろう。後年それを入手し、藩主となった斉昭公が賛を無理やり押し込んだと思われる。大叔父とはいえども付家老となれば一家臣である。まさに身分社会、階級社会の典型的な例であると云えよう。

（付言）本来ならばこの項は、市の職員で専門職である学芸員や文化財保護審議員の先生方にも執筆してもらえればもっと充実した内容になるだろうなと思うのは私だけであろうか？少々気になるところでもある。

（吉成英文）